

衣替えから連想する

下野市教育委員会 生涯学習文化課



現代、制服のある学校や会社等の衣替えは6月1日と10月1日ですが、この日程になったのは明治時代以降のようです。衣替えは平安時代に宮中の行事として始まったとされ、当時は旧暦の4月1日と10月1日に行われたようです。この時には、衣服だけでなく、几帳(間仕切り、風よけ、目隠し用パーテーションのような家具) や畳などの調度品(インテリア用品など) も取り替えたようです。

を5月5日から8月末日までは帷子(裏地無しの単仕立ての着物) を9月9日から3月末日までは綿入れ(布地の間に綿の入った着物) の着用が決められていました。ですから年に4回も衣替えをしたわけです。

の『源氏物語』で、主人公の光源氏を生んだのは桐壺の更衣と呼ばれる女性です。

余談ですが、この几帳の柱(断面四角形の柱の一つの角を削り、角を丸め、その丸くなった両側を鋭角に三角形に切取った面取り) を几帳面といいます。この几帳面と呼ばれる面取り仕上げは、室町時代以降、床の間の違い棚などに用いられる技法ともなります。この細かい装飾は職人が正確に仕上げをしないと美しく完成しないことから、物事をきちんとして行う真面目な人を「几帳面」な人というようになったと言われています。

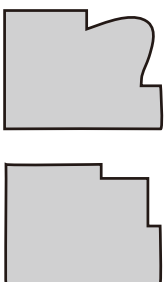
現代のスポーツ施設や学校、企業・官庁など様々な場所に「更衣室」があります。この言葉は、平安時代に衣替え(いわゆる着替え) のことを更衣と呼んでいたことが語源となります。平安時代、宮中で天皇が衣替え(着替え) の際、着替えを用意し着付けのお手伝いする女官の役職名が「更衣」で、この女性は4位か5位の位階(いわゆる貴族階級) にあります。更衣の上は「女御」という階級で、さらにその上の立場の女性が皇后と中宮となります。この皇后・中宮のほか女御と更衣までの立場の人だけが、天皇の居室から寝室まで立ち入ることを許されてい

古代では神様も衣替えすると信じられており、伊勢神宮では新暦の5月と10月の各14日に「神御衣祭」が、京都市賀茂御祖神社(世界遺産下鴨神社) では、新暦5月の立夏の日に更衣祭が行われています。伊勢神御衣祭は、神宮のそばを流れる櫛田川の下流に衣を織る二つの機殿(機織りする社殿) があり、5月1日から13日までの間に身を清めた人達によって麻布と絹が織られ、それぞれ唐櫃に納められた布は14日の未明に運ばれ、神前に供えられます。

江戸時代の武家社会では、4月1日から5月4日、9月1日から9月8日までは裕(裏地付きの着物) として藤原摂関家出身の娘だったようです。紫式部

ました。更衣の定員は10〜12名とされていますが、実際は少人数であったようです。ちなみに女御は主として藤原摂関家出身の娘だったようです。紫式部

空想ですが、甲塚古墳出土の機織りする女性の埴輪は、この古墳の被葬者かもしれませんがこのような神聖な布を織ることができたこと、神前に供えるような布を生産し畿内王権に納めることを認められていたことなどを私達に伝えようとしているのかもしれない。



このほか複数の形状があります。